

南京国際平和通信

第 65 号 (2025 年 3 月)

「南京大虐殺犠牲者清明節追悼式典」開催

4 月 4 日、「南京大虐殺犠牲者清明節追悼式典」が記念館前の南京嘆きの壁（南京大虐殺犠牲者名簿の壁）の前で行われた。南京大虐殺の生存者、遺族、若い学生、留学生の代表が菊の花を持って壁の前に立ち、88 年前に殺された南京大虐殺の犠牲者に哀悼の意を表した。



96 歳の夏淑琴氏が家族の付き添いで来た。1937 年 12 月 13 日、夏淑琴氏の 9 人家族のうち 7 人が日本軍に殺され、当時 8 歳だった彼女は 3 度刺されて気絶したが、一命を取り留めた。



91歳の劉民生氏は娘に付き添われ、亡くなった親族に花を捧げた。「思い出す度に辛くなっても、また来る、また証言する！ 私たちが体験した苦しみを、私たちの子孫が再び遭わないことを願う」と話した。



常小梅さん、徐宏さん、余恵如さんら30人以上の遺族代表と学生代表が順番に献花した。



「祖父よ、今日の南京は廃墟から生まれ変わり、街中に花の香りが漂い、子供たちは太陽の下で走っている。私た

ちは歴史を忘れてはいない……」南京大虐殺の歴史の記憶を受け継ぐ阮紅燕さんと李玉翰さんは、88年前に殺された家族に宛てた手紙を感慨深げに読み上げた。



歴史継承者のチームには、ますます多くの若者が加わっている。

エジプト出身のフェイさんは、これまで何度も記念館を訪れ、紫金草国際ボランティアとして活躍している。彼は「平和の尊さをより理解することができた。家族や友人にも南京大虐殺の歴史を伝え、平和な生活をもっと大切にしてもらいたい」と語った。

スリランカからの留学生サイミさんは、中国に来るまで南京大虐殺のことを知らなかった。彼は「万人坑にある犠牲者の骸骨を見て、とてもショックした。当時の日本軍が行った残虐行為の残酷さを強く感じ、心がとても悲しくなった。戦争はとても恐ろしいものだ。私たちみんなが平和を大切にすることを願いたい」と話した。



セミさん（左）とフェイさん（右）

式典の最後には、南京大虐殺犠牲者の遺族代表が、88 年前に亡くなった大切な人に宛てた手紙をタイムポストに入れ、哀悼の意を表した。



イギリス元国際兵士ジョージ・ホッケー氏の子孫が来訪

今年は中国人民抗日戦争と世界反ファシズム戦争勝利 80 周年であり、イギリス元国際兵士ジョージ・ホック氏の生誕 110 周年と死去 80 周年でもある。4 月 6 日、氏の親族訪問団十数人が記念館を訪れた。

1945 年 7 月、中国人民抗日戦争の勝利前夜、わずか 30

歳だったジョージ・ホック氏は破傷風で倒れ、中国西北部で永眠した。2015年10月、中国の習近平国家主席は英国を訪問した際、歓迎晩餐会の乾杯の挨拶で、中国と英国の国民は第二次世界大戦中に互いに支え合った二つの感動的なエピソードを紹介した。そのエピソードの一つはジョージ・ホック氏が中国の抗日戦争に積極的に参加した話だった。



ジョージ・ホック氏と中国兵たち

ジョージ・ホック氏の甥であるマーク・トーマスさんは、叔父の話に心を動かされ、氏の中国を旅した物語を紹介する本『高原の草：ジョージ・ホック物語』を書いた。

マーク・トーマスさんは、「1938年、叔父は上海でシカゴ・デイリー・ニュースの記者アーチボルド・スティール氏と出会い、二人は親しい友人となり、スティール氏は叔父に南京大虐殺の話をした」と語った。マーク・トーマスさんはこの記念館に感銘を受け、「この展示は歴史の出来事を完全に表し、我々は歴史から学ぶ必要がある」と語った。



マーク・トーマスさん

トーマスさんと一緒にきた人たちに、『A True Friend to China (中国との真の友)』の著者であるアンドリュー・ヒックスさんもいた。1941 年、平和を願い、戦火と危険な峰々を越えて中国に渡ったイギリス FAU 救急隊の約 300 人の隊員についての本を出版した。彼らの輸送チームは、極めて困難な状況下で、貴重な医薬品を中国の地方に配給し、多くの病院の運営を維持した。また、基本的な医療サービスも提供し、中国が最も援助を必要としていた時期に大きな貢献をした。彼らの到着は、中国国民に切望されていた医療支援をもたらしただけでなく、国際友人たちの深い思いやりと揺るぎない支援ももたらした。アンドリュー・ヒックスさんは、戦時中に FAU 救急隊員であったジャック・ジョーンズ氏が家族や友人と交わした手紙や日記を集めて本を完成させた。

アンドリュー・ヒックスさんは、「私は以前、アイリス・チャン氏の本で南京大虐殺の歴史を学んだ。この記念館は、

私がこれまで訪れた中で最高の場所であり、歴史におけるあの悲劇的な時代へのトリビュートで、人々に歴史と平和のメッセージを送っていると思う」と語った。



アンドリュー・ヒックスさん

南京大虐殺生存者の子孫が来館し、家族の物語を語る

4月5日午前、南京大虐殺の歴史記憶を受継ぐ人、南京大虐殺の生存者薛玉娟氏の孫娘である任穎さんが記念館を訪れ、祖母の話を見学者に語った。



南京大虐殺の際、薛氏は日本兵に胸を銃剣で刺された。この体験は彼女の心身に影を残したが、彼女は楽観的で、

定年退職するまで教師として働いた。「おばあちゃん是一家の精神的リーダーだった。その影響で2番目と5番目のおばさんも、そして私もいとこたちも、みんな先生になった。おばあちゃんは私たちに、一生懸命働いて、この歴史をもっと多くの子供たちに伝えなさいと教えた」と任さんは話した。

任さんの感動的な話は多くの見学者を魅了し、多くの親が子供を連れて聞きに来た。中国河北省の小学生張世振さんは壇上に上がりこう話した。「私たちの国が強くなった今、歴史を忘れるわけにはいけない。歴史を繰り返させないために、私たちは一生懸命勉強し、強くならなければならない。」



お別れ

逝去した南京大虐殺生存者 4 人の消灯式を行った

3月11日午前9時、記念館展示室の南京大虐殺生存者の写真の壁で、2025年以降に亡くなった4人の南京大虐殺生

存者、艾義英氏、伍秀英氏、易蘭英氏、陶承義氏の消灯式を行った。



左から：艾義英氏は1月9日に97歳で逝去、伍秀英氏は1月10日に92歳で逝去、易蘭英氏は2月15日に99歳で逝去、陶承義氏は2月15日に89歳で逝去。

艾氏の孫である黄睿さんは「おばあちゃんは、家族が南京大虐殺で受けた苦しみや苦労を忘れず、祖国に貢献するために一生懸命働き、ベストを尽くすようにと教えてくれた」と語った。



陶氏の息子は父が持っていた「国防科学技術献身賞」バッジを記念館に寄贈した。父は普通の労働者だが、すごく責任感を持って職務を遂行した。南京大虐殺の歴史について

てよく話してくれた」と話した。



易氏の息子である李時椿さんは「母の写真ランプが消えたとき、私の心の中には言葉にできない思いが何千もあった。母は亡くなったが、名前は永遠に歴史に残るだろう。私たちは南京大虐殺の歴史記憶を語り継がなければならない。それは母への追悼と慰めなのだ」と語った。

伍氏の息子である羅嗣俊さんは「母は生前、何度も学校やコミュニティに出向き、自分の体験を人々に伝えた。生存者の子孫として、私たちはこの歴史を後世に伝える責任がある」と語った。

中日の紫金草合唱団が同じ舞台上で平和の歌声を披露

3月25日午後、日本紫金草合唱団一行60人余りが第13回紫金草海外公演の旅をした。26日午前、日本紫金草合唱団は記念館を訪れ、南京大虐殺生存者の子孫と交流し、中国の紫金草児童合唱団とともに記念館平和公園にある紫金草花園で平和のシンボル「音楽樹」を植樹した。27日、中日の紫金草合唱団はステージで平和の歌声を響かせた。



見学中の日本紫金草合唱団



曹玉莉さんと夏媛さん

紫金草合唱団のメンバーで日本の中学校で社会科教師を勤めている篠宮雅代さんは、南京大虐殺生存者である夏淑琴氏の孫娘夏媛さんに「おばあさんのご家族が日本軍に殺されて、おばあさんはどう生き残したか」と質問した。

「おばあちゃんと4歳の妹はおこげと残飯で14日間生き延び、その後、民間の救済団体に送られた」と答えた。篠宮さんは「あなたのおばあさんの話を忘れない、私は生徒たちに歴史の真実を伝えたい」と話した。



中国国際ラジオ放送局の元日本人アナウンサーであった坂東弘美さんは、2001年に日本紫金草合唱団が南京で初公演したときに司会者を勤めた。彼女の父親は中国を侵略した元日本兵で、1937年12月14日に南京に到着し、一日滞在した間、恐ろしい光景を見たという。坂東さんは「2004年に父が残した手紙をまとめて出版し、2012年には名古屋市長の南京大虐殺を否定する発言に抗議し、市民の力を結集して平和コンサートを開催した。父の世代の悲劇を繰り返さないことを心から願っている。平和は何よりも尊い宝物だ」と話した。



記念館平和公園の紫金草花園で、記念館の周峰館長（左から 2 人目）、日本紫金草合唱団の大門高子名誉団長（右から 1 人目）、中村昭一団長（左から 1 人目）、南京紫金草児童合唱団のメンバー何泉傑さん（右から 2 人目）とともに、平和を象徴する「音楽樹」を植えた。



中村昭一さんは「松の木は逞しさと粘り強さを象徴しており、この松の木のように平和が人々の心に根付くことを願っている。私は 2001 年に団員として南京を訪れて以来、今回は団長として最も感動された。音楽は言葉や国境を越

え、中国と日本の人々の心に響きを残すことができると信じている」と語った。

27日、南京紫金草児童合唱団の子どもたちと日本紫金草合唱団のメンバーは、同じステージで中国の民謡「茉莉花」と「平和の花紫金草」を合唱した。終了後、白髪の日本の老人と中国の子供たちと感動で抱き合った。



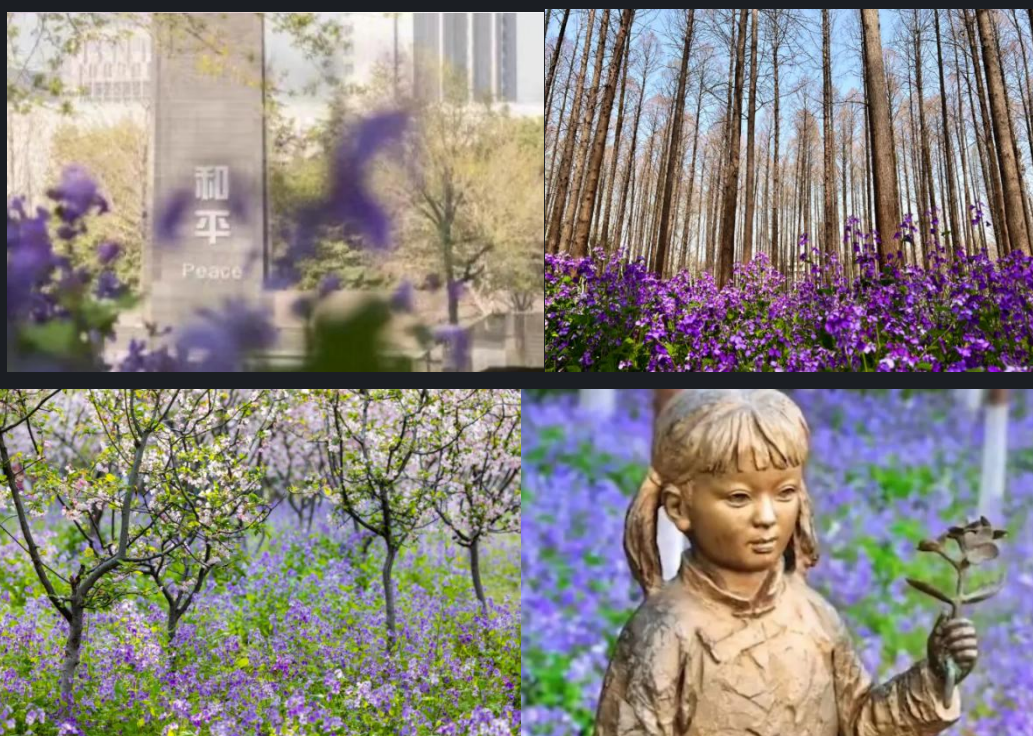
大門さんは目に涙を浮かべながら、「中国の子供たちが音楽で平和の声を伝えてくれたことに深く感動した。日本で紫金草の種を蒔きたい、日本の各地に根付きたい、平和を私たちの心に根付きたい」と語った。

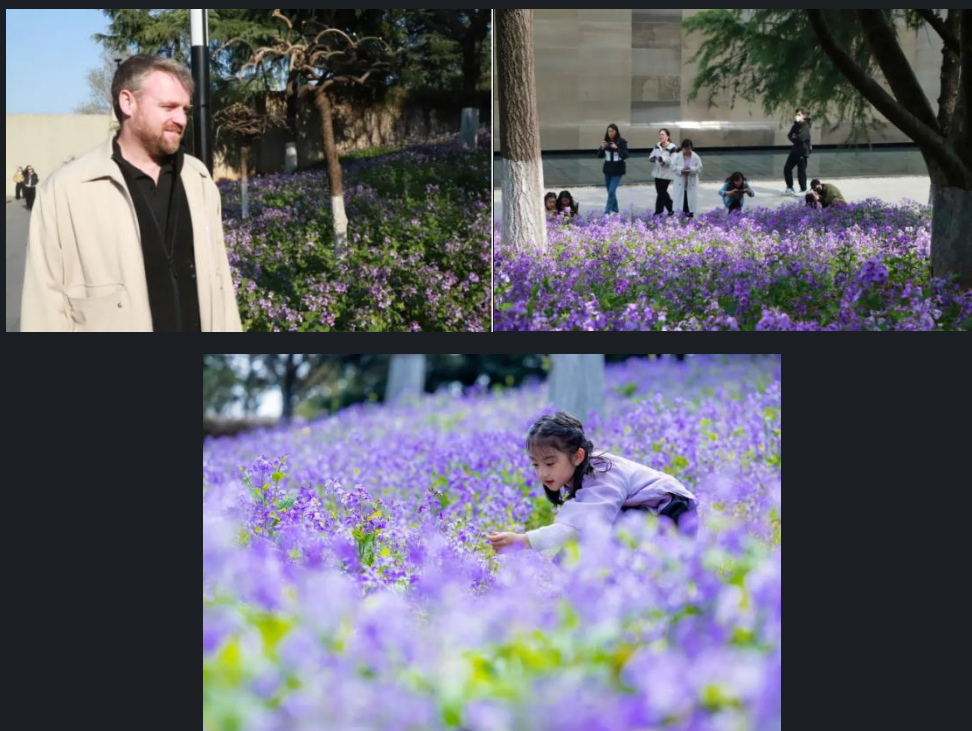


春の南京には平和の花紫金草が咲く

3月、南京の市内でも市外でも、田園地帯でも川沿いでも、紫金草が盛んに咲くようになった。紫金草は厳しい冬の寒さを凌ぎ、早春に花を咲かせた。南京大虐殺の翌年も、遅しく咲いたお花だった。紫金草の強さは南京人の不屈で粘り強い性格や南京が生まれ変わった活力と似たものだと考えられる。

オランダ人見学者のブリンクマンさんは、「私は南京に来てから紫金草の物語を理解できた。人間の善良さや戦争に対する日本民衆の反省を知って、平和の大切さを実感した」と語った。





国際ボランティアとして記念館で活動 平和の尊さを実感

95 年以降生まれのアルジェリア人留学生エマさんは現在、南京の東南大学海外教育学院で生物医学を専攻している。中国に来てもうすぐ 6 年になるが、南京は第二の故郷だと思っている。彼女は記念館内にある国際友人ジョン・ラーベの銅像の前で「ラーベ日記」を読みあげ、第 8 回「感謝祭-南京安全区」国際平和ウォークにも参加した。南京大虐殺の歴史や南京市の過去と現在をより深く理解することができた。卒業後は、人が親切でとても住みやすい南京に残って暮らしたい」と語った。



マレーシア人留学生の方怡京さんは、南京理工大学海外教育学院の留学生アシスタントを勤めている。彼女はバン
グラデシュ、タイ、インドネシアからの留学生 20~30 人
を記念館に案内し、平和の大鐘を鳴らし、紫金草の種をま
く儀式にも参加した。戦争は人々につらい記憶をもたらした。
私たち留学生の中には、母国でそのような痛みを経験
した人もいたので、なおさら共感できるようになる。だから、
私たちが記念館でボランティアをしたとき、平和の尊
さを学ぶことができた。私たちは記念館で見たこと、聞いた
こと、感じたことを、個人のアカウントを通じて海外の
ソーシャルメディアに投稿した。より多くの人々に、ここ
で何が起こったのか、そして人々が平和と生命を愛する南
京の今を知ってもらいたい」と話した。